

原 著

大学生の職業意志決定について

滝 本 孝 雄* 林 潔**

FACTOR ANALYTIC STUDY OF STUDENTS'
CAREER DECISION MAKING

Takao TAKIMOTO and Kiyoshi HAYASHI

This study aimed to find a structure of university students' career decision making, to find sex differences, and to demonstrate hypothesis that students' tendencies to career decision making is relating to their personality traits.

Study of students' career decision making is presupposed to students' career counseling.

This study had been made between June and July 1981. Subjects of this study: 176 male students, 239 female students, total 416 students in five national and private universities in Tokyo metropolitan area.

This questionnaire was arranged by items from our presurvey (free description) and the questionnaire on career decision making by O'Neil, et al.

The subjects of this study were requested to answer with five-point Likert typed scale to these thirtynine items and MPI.

As the results we found six factors by varimax factor analysis. They are I. factor of working environment ※, II. factor of emotionality ※, III. factor of abilities and directivities ※, IV. factor of social thought of value (male), V. factor of family's thought of value (male), VI. factor of family's and social thought of value (female) (※both sex).

On the sex differences, we found that female students' specific tendencies of career decision making are that; strong consciousness to sex differences, desiring to professional career, controlled with family's needs, lack of self confidence, and influencing by working environment.

On the relation between career decision making and personality traits we found positive correlation between extraversion and Self experiences (male), and Father's role model (female), neuroticism and Fear of failure, Fear of success, Lack of assertiveness, Lack of confidence, Role conflict (male), and negative correlation between extraversion and Lack of assertiveness, and Role conflict.

1. 序

進路、職業の問題は、学生の学園生活における満足

もたらす条件の一つである。

すなわち、現在の学園生活における満足度は、卒業後の進路、成功の確率といった、将来の見通しによっても

* 独協大学教養部

Division of Liberal Arts, Dokkyo University

** 白梅学園短期大学

Shiraumegakuen College

規定される。和田、田崎は、これを大学、専攻への帰属意識の因子と呼んでいる²⁵⁾。

このことは、大学生を対象とした意識調査にもあらわれている。たとえば、学生の不安、悩み、問題としていることの対象の第1位に、進路の問題があげられている(学習院大⁶⁾)。新入生対象の調査でも、関心のあるものとして、学業に続いて就職の問題があげられている(東工大²³⁾)。公共の職業相談機関においても、在学者の利用者のうち71.2%が、大学、短大生によって占められている(都職栢²⁴⁾)。そして、学生時代に職業の志望が早くから安定していた群の方が、志望の動揺していた群よりも、適応水準が一般的に高く、現職が学生時代の志望と一致している群よりも適応水準が高い¹⁸⁾。

そのようなことから、大学生に対する進路選択への援助が、学生相談の主要な課題の一つとなってくるのである。

個人の職業選択に組織的に関係する変数を明らかにすることは、職業選択についての経験的な理解をうることであり、および職業選択と職業発達個人の差を説明するものである⁹⁾。そして、職業選択の要因の相互関連性、職業決定に影響する領域についての理解は、職業行動の理解、カウンセリングにおける処置、職業プログラムの促進に重要な条件である¹⁸⁾。

職業発達の過程は、意志決定の過程として理解できる¹⁰⁾。意志決定と職業発達は、ガイダンスとカウンセリングにおいても、最も大きな関心が払われるべきものである⁹⁾。ホイット(Hoyt, K. B.)は、職業界への適応の技能の一つとして、職業意志決定の技能をあげている¹⁹⁾。

意志決定の問題は、経済学者らが発展させて来た論理である⁵⁾。また、ジラー(Ziller, R. C.)は、ゲームの理論を用いて、職業選択は個人の冒険のしかたから推論できることを明らかにした²⁶⁾。

ハー(Harr, E. L.)とオニール(O'Neil, J. M.)らは、職業意志決定についての構成因子をあげている^{9,17)}。その他、職業計画立案の因子¹⁾、職業意志決定のモデル^{7,11,14,21)}、職業意志決定の条件⁸⁾、職業意志未決定の要因^{15,19,20)}が指摘されている。

職業意志決定と他の変数との関係については、ディレイ(Dilley, J. S.)によると、職業意志決定の能力と職業的成熟とは高い相関がみられた⁴⁾。また、ホランド(Holland, J. L.)らは、職業意志決定とパーソナリティおよび興味との関係を明らかにした¹²⁾。

本研究の目的は、次の視点から大学生の職業意志決定について検討することである。(1) 因子分析によって、

学生の職業意志決定の因子構造を明らかにする。(2) 職業意志決定について性差がみられるという仮説のもとに、このことについて検討する。(3) 職業意志決定はその学生のパーソナリティとも関連するという仮説のもとに、この仮説を検証する。

あわせて、職業意志決定を援助するカウンセリングの方法論についても考察する。

2. 方 法

学生の職業意志決定の条件についての第1回予備調査を、1981年4月に実施した。

この第1回予備調査は、「あなたが自分の職業を決めることについて、影響を与える条件、考えに入れる条件について、自由に箇条書きにして書いてください」というインストラクションによっておこなわれた。対象は58人の男女の四年制大学生である。

この第1回予備調査の結果から、この問題についての質問項目群が作成された。

これらの質問項目と、オニール(O'Neil, J. M.)らの職業意志決定に関するチェックリスト¹⁷⁾の28の質問項目とを合わせて、重複項目を除外して作成した質問紙で、第2回の予備調査をおこなった。

第2回予備調査は、1981年5月に59人の大学生を対象に実施した。この結果を検討して、学生の職業意志決定に関する39項目の質問紙を作成した。この質問紙の各項目は、肯定(1. 強い影響を受ける)から否定(5. 少しも影響を受けない)の5段階尺度で評定された。

本質問紙の39項目は、次のとおりである。

1. (家族) 自分の価値観、ものの考え方や行動のしかた
2. (児童期の経験) 自分の児童期の経験
3. (母親の役割モデル) 家族や仕事や職業に対する、あなたの母親のあり方や考え方
4. (父親の役割モデル) 家族や仕事や職業に対する、あなたの父親のあり方や考え方
5. (社会) 社会の価値観、ものの考え方や慣例
6. (教育経験) 学校の価値観、考え方や慣例
7. (友人、仲間の影響) 友人や仲間の価値観、考え方や行動
8. (マス・メディア) ラジオやテレビ、映画、本、雑誌にあらわれている価値観、考え方や行動
9. (個人的条件) 自分の能力、興味、考え方、意欲や職業に対する期待
10. (自分に対する期待) 自分自身に対する期待
11. (能力) 現在もっているか、将来伸ばすことの

できる技能

- 12. (興味) 自分の関心をひく活動や仕事の分野
- 13. (意欲) 人生のある目標をなしとげようとする

望み

- 14. (態度) 職業についての自分の考え方や感じ方
- 15. (社会, 経済的条件) 社会的, 経済的条件
- 16. (社会的階級) 自分や家族の社会的, 経済的水準

準

- 17. (民族) 自分の民族
- 18. (性差) 性により個人的, 社会的扱いがちがうという経験

うという経験

- 19. (職業の需要供給) 求人, 求職のバランス
- 20. (状況) 予測できない状況やできごと
- 21. (チャンス) その職業につける機会
- 22. (苦闘の結果) 努力や困難の克服
- 23. (心理的, 社会的なことが原因となる自分の情緒の問題) 自分自身の情緒の問題や, 周囲の問題や, 個人的問題

個人的問題

- 24. (失敗をおそれる気持) どうせだめだろうという気持
- 25. (成功をおそれる気持) よいことがあっても, そのあとでよくないことがおこるのではないかと考えて成功を避ける

う気持

- 26. (断行を欠く) 自分自身を表現しようとしな
- い, 自分らしく行動しようとしな

- 27. (自信を欠く) 自分の能力について自信がない
- 28. (役割葛藤) ああもしないといけない, こうもしないといけないという対立した行動のしかたにはさまれて, どうにでもなれという無力感

- 29. (職場や仕事の条件) 職場や仕事の将来性
- 30. (勤務条件) 労働と報酬のバランスがとれていること

- 31. (勤務時間) 勤務時間
- 32. (組合) 労働組合があること
- 33. (専門性) 大学の専門が生かせること
- 34. (家庭との関係) 家庭と仕事との両立
- 35. (待遇) 初任給の額
- 36. (通勤条件) 通勤距離
- 37. (職場の社会的信用) 職場の社会的信用
- 38. (人間関係) 職場の人間関係がよいこと
- 39. (休暇) 休暇, 週休二日制など

本質問紙とモーズレイ性格検査とを用いて, 1981年6月~7月に, 首都圏の国立大学1校(総合共学大学), 私立大学4校(総合共学大学1校, 文科系共学大学2校, 文科系女子大学1校)の学生を調査対象とした。被験者

は, これら四年制大学の文科系の第1部学生であって, 男子176人, 女子239人, 計415人であった。

大学生の職業意志決定の構造について考察するために, varimax 法による因子分析をおこなった。続いてt検定によって, 各項目についての性差の検討をおこなった。

職業意志決定と性格との関連については, 意志決定についての各項目と, モーズレイ性格検査の外向傾向, および神経症的傾向との相関係数を算出した。

3. 結果および考察

大学生の職業意志決定についての39項目に対するvarimax 法による因子分析の回転後の結果は, 表1のとおりである。この結果, 次の6因子が抽出された。

第I因子〔職場環境の因子〕

男子の第1因子と女子の第1因子である。これは, 個人の意志決定についての, 職場環境の条件である。

〔例〕 31. (勤務時間) 35. (待遇)

第II因子〔情緒性の因子〕

男子の第2因子と女子の第2因子である。これは, 意志決定に対する, 情緒的, 人格的条件である。

〔例〕 27. (自信を欠く) 24. (失敗をおそれる気持)

第III因子〔能力および志向の因子〕

男子の第3因子と女子の第3因子である。これは, 意志決定における個人の能力, および志望の方向性に関する要因である。

〔例〕 12. (興味) 10. (自分に対する期待)

第IV因子〔社会の価値観の因子〕

男子の第4因子である。これは, 意志決定に対する, 社会, 教育経験, 友人, 仲間, マスメディアなどの考え方の影響である。なお, この第4因子の負荷量が高いものの中に, 22. (苦闘の結果) が入っているが, これについての解釈はやや困難である。

〔例〕 7. (友人, 仲間の影響) 8. (マスメディア)

第V因子〔家族の価値観の因子〕

男子の第5因子である。これは, 意志決定に対する, 父母, 家庭の考え方の影響である。

〔例〕 4. (父親の役割モデル) 3. (母親の役割モデル)

第VI因子〔家族および社会の価値観の因子〕

女子の第4因子である。これは, 意志決定についての, 父母, 家族, 社会, 教育経験, マスメディアの考え方の影響である。

〔例〕 3. (母親の役割モデル) 1. (家族)

表 1 職業意志決定についての因子分析結果

	男 子					女 子			
	1	2	3	4	5	1	2	3	4
1	.032	-.243	-.093	-.063	-.608	.092	.083	-.176	-.581
2	-.147	-.171	.131	-.149	-.045	-.152	-.017	.053	-.070
3	.036	-.214	-.019	-.114	-.622	.039	-.029	-.070	-.609
4	.086	-.012	.013	-.096	-.747	.005	-.088	.025	-.567
5	.270	.027	-.109	-.359	-.367	.347	.150	.236	-.456
6	.181	-.051	.013	-.490	-.169	.136	.077	.100	-.414
7	.013	-.034	.063	-.593	-.146	.067	.176	.025	-.486
8	.113	-.010	-.042	-.550	-.115	.203	.252	.127	-.437
9	.161	-.023	.508	.178	-.019	-.043	.061	.610	.004
10	.133	.003	.624	.122	-.003	.056	.096	.633	-.154
11	.166	.114	.620	-.075	.089	.045	-.000	.674	-.072
12	-.071	.081	.647	-.075	.136	-.026	-.045	.608	-.028
13	-.188	.171	.603	-.247	-.029	-.142	-.031	.517	.040
14	-.079	.070	.601	-.187	-.008	-.053	-.011	.613	.123
15	.374	-.286	-.033	-.207	.071	.391	.094	.220	-.188
16	.458	-.369	-.057	-.247	-.043	.296	.162	.122	-.299
17	.059	-.154	.103	-.207	-.023	.071	.162	-.043	-.235
18	.169	-.274	.056	-.350	.006	.278	.116	.151	-.098
19	.326	-.318	-.071	-.344	.109	.338	.236	.149	-.072
20	.225	-.529	-.105	-.237	.019	.181	.335	.009	-.083
21	.314	-.422	.069	-.456	.124	.263	.201	.187	-.049
22	-.050	-.210	.310	-.431	.072	.163	.221	.147	-.004
23	.120	-.439	.294	-.248	-.029	.265	.348	.164	-.057
24	.025	-.732	-.005	-.124	-.060	.168	.630	-.027	-.056
25	.031	-.552	-.178	-.066	-.154	.139	.608	-.002	-.095
26	.056	-.722	-.129	-.030	-.104	.041	.628	.032	-.122
27	.009	-.761	-.029	.013	-.071	.046	.745	.052	-.041
28	.097	-.636	-.151	.027	-.179	.041	.661	-.016	-.120
29	.566	-.211	.118	-.229	-.016	.533	.075	.179	-.070
30	.744	-.073	.057	-.149	.039	.766	.059	-.060	.019
31	.803	-.069	.045	-.045	.003	.783	.077	-.148	-.032
32	.474	-.064	-.213	-.028	.014	.469	.112	-.008	-.116
33	.326	.107	.390	-.058	-.193	.243	-.197	.149	-.075
34	.490	.029	.090	-.090	-.368	.357	-.127	-.040	.034
35	.760	-.073	-.042	-.064	.013	.704	.090	-.112	-.173
36	.654	-.045	.145	.079	-.133	.624	.163	-.125	-.042
37	.608	-.140	.104	-.205	-.282	.691	.075	.088	-.164
38	.449	-.132	.270	-.286	-.219	.602	.123	-.006	-.235
39	.742	.059	.097	-.032	-.111	.702	.095	-.135	-.098
寄 与 率	22.316	16.324	12.353	10.254	8.623	23.975	13.823	12.808	10.619
累積寄与率	22.316	38.639	50.992	61.246	69.869	23.975	37.798	50.607	61.226

職業意志決定についての性差の検討の結果は、第 2 表のとおりである。

すなわち、性差に有意差が認められた項目で、男女の回答の方向が逆（すなわち一方が肯定の方向であり、他

表 2 性 差 の 比 較

	男子		女子				男子		女子		
	$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD			$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
1	3.01	1.17	3.25	1.07		21	3.48	1.22	3.75	1.10	※
2	3.18	1.24	3.04	1.23		22	3.61	1.13	3.68	1.03	
3	2.75	1.19	3.32	1.17	※※	23	3.53	1.18	3.63	1.07	
4	3.09	1.27	3.21	1.17		24	2.40	1.20	2.74	1.18	※※
5	3.16	1.14	3.22	1.04		25	1.95	1.12	2.00	1.09	
6	2.99	1.26	2.92	1.07		26	2.15	1.22	2.29	1.14	
7	2.99	1.18	3.22	1.11	※	27	2.57	1.18	2.98	1.21	※※
8	2.88	1.13	2.97	1.09		28	2.48	1.25	2.50	1.23	
9	4.59	.76	4.67	.63		29	3.19	1.26	3.68	1.05	※※
10	4.25	.95	4.16	.86		30	3.40	1.25	3.51	1.18	
11	4.11	.98	4.22	.83		31	3.21	1.26	3.26	1.22	
12	4.61	.68	4.66	.61		32	2.13	1.16	2.05	1.08	
13	4.11	1.01	4.16	.89		33	3.69	1.30	4.07	1.05	※※
14	4.15	.90	4.29	.80		34	3.36	1.28	4.01	1.15	※※
15	3.44	1.07	3.48	1.04		35	2.59	1.26	2.66	1.25	
16	2.77	1.19	2.93	1.17		36	2.88	1.30	3.17	1.25	※
17	1.62	1.02	1.66	.98		37	3.52	1.17	3.72	1.10	
18	1.96	1.14	3.03	1.25	※※	38	3.90	1.16	4.08	1.06	
19	2.71	1.22	3.08	1.15	※※	39	3.05	1.30	3.08	1.20	
20	2.69	1.18	2.66	1.14							

※ $p < .05$ ※※ $p < .01$

方が否定の方向にあるもの)の項目は、3. (母親の役割モデル), 36. (通勤条件) であった。

同じく、性差に有意差が認められたが、その差が相対的な差であって、肯定、否定という方向の差としてはあらわれなかった項目は、次のとおりであった。すなわち、7. (友人、仲間の影響), 18. (性差), 19. (職業の需要供給), 21. (チャンス), 24. (失敗をおそれる気持), 27. (自信を欠く), 29. (職場や仕事の条件), 33. (専門性), 34. (家庭との関係) であった。

モーズレイ性格検査との関係は、次のとおりであった。

まず、外向傾向については、男子では、10. (自分に対する期待) とは .321 で正の相関が、26. (断行を欠く), 28. (役割葛藤) とは -.369, -.339 で負の相関がみられた。女子では、外向傾向と、4. (父親の役割モデル) とは .319 の正の相関がみられた。

次に、神経症的傾向については、男子ではこの傾向の高い者ほど、24. (失敗をおそれる気持), 25. (成功をおそれる気持), 26. (断行を欠く), 27. (自信を欠く), 28. (役割葛藤) という情緒的要因の項目と、それぞれ、.443, .417, .334, .331, .522 という正の相関がみられ

た。しかし、女子では両者の間には、特に相関は認められなかった。

大学生の職業意志決定に際しては、男女ともに、職場環境の因子、情緒性の因子および能力および志向の因子が重視されていることが理解できる。

このほかの因子として、女子では、社会および家族の価値観の因子が抽出された。しかし、男子ではこの因子は2つの因子として分化し、社会の価値観、家族の価値観がそれぞれ別個の因子として抽出された。これは、男子では、家族のモデルと社会のモデルを、別個のものとして認知しているが、女子では、この2つのモデルを自分に対する影響としては同一のものとして受止めていることによるものでもあろう。

性差については、次の項目が職業意志決定に際して、男子よりも女子の方が影響を受けるものであった。すなわち、1. (家族), 7. (友人、仲間の影響), 21. (チャンス), 29. (職場や仕事の条件), 33. (専門性), 34. (家庭との関係) などの項目であった。女子が、家族や、家庭と仕事との両立について、男子よりも影響を受けるということは、女子が男子と比べより家庭に規定されることがいまだに大きいことを反映しているものと考えら

れる。また、友人、仲間の影響や、職業につける機会について、男子よりも女子が影響を受けているのは、女子が周囲の状況により受動的であり、行動の基準を周囲に合わせるという現実によるものであろう。また、職業や仕事の条件、専門性というものを男子よりも女子が重視していることは、職業意志決定について自分の好みを前面に出すものでもあり、あわせて職業選択についてのゆとりを意味するものかも知れない。

次の項目は、女子に比較して男子がより影響を受けていないものである。

18. (性差) については、男子が女子に比べて、性による区別を強く意識していないことの反映であろう。
19. (職業の需要供給) については男子が女子に比べて就職に有利である現状から、特にこのことについて意識をしないですむということによるものでもあろう。また、24. (失敗をおそれる気持)、27. (自信を欠く) の2つの項目は、男子の職業意志決定に、余り重要な条件とはなっていないことが理解できる。職業につくことへの必然性がここにうかがわれる。

性格特性と職業意志決定については、いくつかの点で関連が認められた。

外向傾向については、男子では、この傾向の高い者は、自分に対する期待と正の相関がみられた。これは、外向型の者は、職業という社会的活動についての自分に対する期待や自信が強いことを意味しよう。

また、外向傾向の低い者(すなわち内向型)が、状況および自信を欠くと正の相関がみられた。これは、内向性の者が、内向型特有のパーソナリティである。行動への決断の鈍さ、考えすぎて行動できないといった特徴によるものでもあろう。

女子では、外向傾向の高い者が、父親の役割モデルと正の相関がみられた。外向型的女子学生は、自分の父親のあり方や考え方に影響を受けるという傾向が推察できる。

神経症的傾向に関しては、女子では特に相関の認められた項目はなかった。しかし、男子では、神経症的傾向の高い者が、失敗をおそれる、成功をおそれる、断行や自信を欠く、役割葛藤という項目と正の相関が認められた。これらの項目は、いずれも神経症的傾向が高い者に一般に見られる特徴でもある。職業意志決定においても、これらの条件が働くものと理解できる。すなわち、職業意志決定においては、個人のパーソナリティ特性が影響するという仮説を検証することができた。

職業意志決定を促す方法論として、ゲーム導入の試みもなされている²⁾。また、ソアセン(Thoresen, C. E.)

らは、職業意志決定について、プログラム化された学習モデルを設定している²²⁾。

現実には、職業意志決定のカウンセリングは、きわめて制限された時間の中でおこなわれている。そのため、これらのプログラム化された方法論は、わが国の大学生の職業意志決定に対する方法論に示唆を与えるものと思われる。そして、本研究の結果示された6つの因子は、このプログラムの構成要因となるものである。

文 献

- 1) Ard, R. F. and Hyder, Jr. L. L.: Career planning objectives of college students and activities perceived as instrumental in their achievements. *J. of College Student Personnel*, 1978, 19, 1, 48-54.
- 2) Boocock, S. S.: The life career game. *Personnel and Guid. Journal*, 1967, 46, 4, 328-334.
- 3) Crites, J. O. and Vocational psychology, N. Y.: McCraw-Hill Book Co. 1969.
- 4) Dilley, J. S.: Decision-making ability and vocational maturity. *Personnel and Guid. Journal*, 1965, 44, 4, 423-427.
- 5) Edwards, W.: The theory of decision making, *Psychological Bulletin*, 1954, 51, 4, 380-417.
- 6) 学習院大学学生相談室: 学生生活調査報告書, 1978.
- 7) Gelatt, H. B.: Decision-making a conceptual frame of reference for counseling. *J. of couns. Psychol.*, 1962, 9, 3, 240-245.
- 8) Gelatt, H. B. and Clarke, R. B.: Role of subjective probabilities in the decision process. *J. of couns. Psychol.*, 1967, 14, 4, 332-341.
- 9) Harr, E. L.: Decision-making and vocational development guidance monograph series IV. Boston: Houghton Mifflin Co. 1970.
- 10) Hershenson, D. B. and Roth, R. M.: A decision process model of vocational development. *J. of couns. Psychol.*, 1966, 13, 3, 368-370.
- 11) Hilton, T. L.: Career-decision making. *J. of couns. Psychol.*, 1962, 9, 4, 291-298.
- 12) Holland, J. L. and Nicholas, R. C.: The development and validation of an indecision scale: the natural history of a problem in basic research. *J. of couns. Psychol.*, 1964, 11, 1, 27-34.
- 13) Hoyt, K. B.: Towards a theoretical career development process. *New directions for educational worker and careers*. 1979, 6,

- 1-16.
 - 14) Johnson, R. H. : Individual styles of decision making: a theoretical model for counseling. *Personnel and Guid. Journal*, 1978, 59, 6, 530-536.
 - 15) Jones, L. K., Chenery, M. F. : Multiple subtypes among vocationally undecided college students. *J. of couns. Psychol.*, 1980, 27, 6, 469-477.
 - 16) 金沢大学法文学部心理学研究室 : 大学生の職業人としての態度形成, 1963.
 - 17) O'Neil, J. M., Ohlde, C., Barkè, C., Gelwick, B. P. and Garfield, N. : Research on a workshop to reduce the effects of sexism and sex role socialization on women's career planning. *J. of couns. Psychol.*, 1980, 27, 4, 355-363.
 - 18) O'Neil, J. M., Ohlde, C., Tollefson, N., Barkè, C., Piggott, T. and Watt, D. : Factors, correlates, and problem area affecting career decision making of a cross-sectional sample of students. *J. of couns. Psychol.*, 1980, 27, 6, 571-580.
 - 19) Rubinton, N. : Instruction in career decision making styles. *J. of couns. Psychol.*, 1980, 27, 6, 581-588.
 - 20) Slaney, R. B. : Expressed vocational choice and vocational indecision. *J. of couns. Psychol.*, 1980, 27, 2, 122-129.
 - 21) Stimac, M. : A model for evaluation of decision passages: a facet of self-assessment. *Personnel and Guid. Journal*. 1977, 56, 3, 158-163
 - 22) Thoresen, C. E. and Mehrens, W. A. : Decision theory and vocational counseling. *Personnel and Guid. Journal*, 1967, 46, 2, 165-172.
 - 23) 東京工業大学学生相談室 : 学生相談室報告書, 1979, 7.
 - 24) 東京都職業適性相談所 : 事業概要昭和55年度報, 1980.
 - 25) 和田孝彦・田崎醇之助 : 大学生の学園生活満足度の分析, 白梅学園短期大学紀要, 1978, 14.
 - 26) Ziller, R. C. : Vocational choice and utility for risk. *J. of couns. Psychol.*, 1957, 4, 1, 61-64.
-